



TITLE:

1942年の彗星界 (1942年の天文年鑑
)

AUTHOR(S):

CITATION:

1942年の彗星界 (1942年の天文年鑑). 天界 1941, 22(247): 24-25

ISSUE DATE:

1941-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168302>

RIGHT:

冥王星の1942年

12年前に双子座の δ 星附近で発見された此の冥王星は、太陽系の最外部を極めて徐々と其の軌道によつて運行してゐる。今1942年の初頭には、蟹座の r 星より北々西 14° ばかりの邊を逆行してゐるが、四月14日に同座30番星の南隣で停留となり、それ以後は順行する。曆の上では、一月の末に對衝となり、地球から37.382單位の距離に近づくとは言へ、やはり大した遠距離であるし、光度も、眼視で14.5、寫眞で15等級であるから、觀測には世界一の機械が必要である。

六月末に火星と會合し、七月末は水星と相前後して、太陽と會合し、八月下旬には金星と會合することになつてゐるけれど、冥王星の黄緯が 5° もあるため、視野中で他の大遊星と近づくことは無い。

十月からは曉の星となり、十一月8日に r 星の北東邊で停留し、年末には幾らか其の速度を増しつゝ、太陽から離れて行く。

冥王星の日心位置

毎日9時	日心黄經	日心黄緯	動 徑	光 度
	$^{\circ}$	$^{\circ}$	單位	m
一月 1 日	124 39.2	+4 34.9	38.382	14.5
三月22日	124 58.0	+4 39.9	38.326	14.5
六月10日	125 16.9	+4 45.5	38.271	14.5
八月29日	125 35.9	+4 51.0	38.215	14.5
十一月17日	125 55.0	+4 56.6	38.160	14.5
翌二月 5 日	126 14.2	+5 02.2	38.104	14.5

1942年の彗星界

今1942年内に近日點へ歸つて来る週期彗星として期待されるものは下の8星である。

星 の 名	週 期	近日距離	離心率	引 數	昇交點	傾 斜	歸來
	年	單位			$^{\circ}$	$^{\circ}$	
グ リ グ	5.02	0.908	0.691	355 18	215 34	17 28	5月
第二シワスマン・ワハマン	6.43	2.094	0.394	357 58	126 06	3 44	2月
ペ ラ イ ン	6.59	1.195	0.660	166 52	242 24	15 44	10月
ラインムート	7.23	1.857	0.503	8 41	124 58	8 04	8月
ホ ー ム ズ	7.29	2.318	0.384	21 35	329 36	19 35	10月
テ ル フ	8.33	2.450	0.404	160 49	204 11	27 16	6月
フオーブス	6.38	1.525	0.555	258 46	25 47	4 36	
テ イ ラ	6.76	1.558	0.546	354 47	113 55	15 37	

此の8つの彗星のうち、最も古い時代からの馴染みの星は**テルフ星**である。1884年にドイツの故テルフ博士に発見されたもので、今までに7回も出現してゐる。こんどが第8回の出現である。平均週期が8年4ヶ月で、六月に近日點に歸つて来る豫定であるが、地球との關係から言ふと、六一七月頃に発見され、

それから年末まで連続的に観測が行はれるだらう。光度は可なり淡いものらしいが、しかし之れは軌道が大きく、星から地球や太陽までの距離が遠いためである。

ヲルフ星に次いで、古い馳染みの星はグリグ星である。之れは精しくは**グリーグ・シェレル彗星**といひ、1902年にグリグ氏が発見し、更に1922年にシェレル氏が獨立に発見したもので、最近には1937年に第5回の出現をした。今回は五月に近日點に歸つて来る豫想であるが、其の頃ドシ地球に近づいて来る都合になつてゐるから、恐らく三―四月の頃に夕空に於いて発見されるだらうし、其の後、約半年の間、日没後の空を賑はすだらう。

ホームズ彗星は1892年に最初に見つけられた可なり古顔であるが、1906年に3回目の出現が観測されたきりで、最近は35ヶ年も観測が行はれてゐない。言はゞ行方や不明の星である。今年は秋の十月頃に近日點へ歸つて来る豫想であるが、しかし之れは頗る怪しい。假りに此の豫想通りとすれば、地球との関係は大變近くて、八―九月の頃に発見されるだらうと思はれるけれど、軌道は大いし、位置が可なり不安であるから、推算は困難である。光度も10等級以下だらう。

二月に**第二シヴスマン・ワハマン彗星**が近日點へ歸來するのであるが、實は既に此の星は1941年十一月から世界一般に観測されてゐる。1941 f 星である。

ペライン彗星といふのも、名は可なり古くから聞えてゐる。何しろ1896年に発見され、1909年に再び現はれたのだ。1922年に故中村要氏が発見されたと報ぜられたことがあるが、之れは確認されなかつた。従つて、此の星は1909年以來その行方が明らかでない疑問の星である。30ヶ年以上も失踪してゐるので、軌道も位置も不安であつて、此の十月に近日點へ歸つて來るといふ豫想も餘り信頼されない。若し此の豫想が正しいとすれば、十月頃、此の星は地球から2單位以上も離れ、大體太陽の反對側であるから、こんども観測は極めて困難であらう。

ラインムト星は1928年に発見され、それから一週期して、1935年にもチャンと発見されてゐる。しかし、今度は八月頃に近日點に歸つて來るのだから、其の頃、地球から見ると、太陽の反對側に當つてゐて、都合は悪い。ことによると、むしろ、五一六月頃に発見されるかも知れない。

る**テイラ星**も、**フォブス星**も、只1回発見されたきりで、其の後は失踪者である。テイラ星は1923年、1929年、1936年と、3回も近日點通過の時期が観測されずに終つた。フォブス星も1936年に歸來した筈なのに、誰も之れを見なかつた。こんなわけだから、今1942年度の歸來も、豫想は甚だ困難で、果してうまく見つかるものか、否か、分らない。殊に、テイラ星の方は、1916年の時に、分裂した記録を持つてゐるのだから、其の後、今日まで26ヶ年間に、全く破壊されて了つたかも知れない。

但し、彗星界では、毎年例の通り、待望の週期星ばかりでなくて、全く新しい彗星も可なり夥しく発見されるのであるから、熱心家は、毎夜、怠らずに大空を搜索することである。戦亂のため、歐洲あたりでは、彗星の新発見も、観測も甚だ振はない現状であるが、我が日本では、近年にも若干の彗星発見が成功したこともあるのだから、我が同胞の益々奮起されんことを望む。